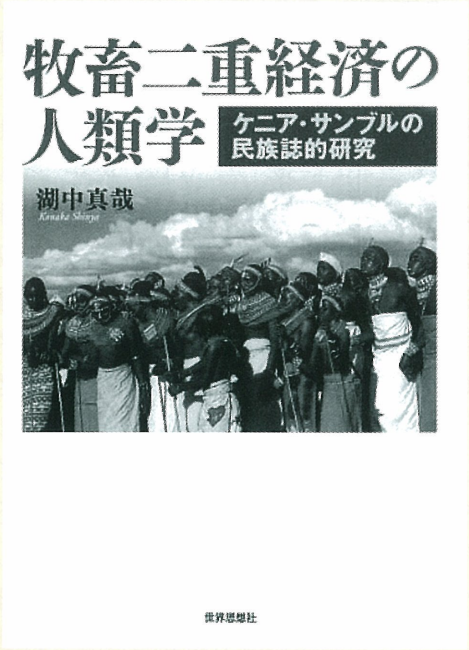
第11回

決定「国際開発研究 大来賞」

主催：財団法人 国際開発高等教育機構（FASID）

「国際開発研究　大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた大来佐武郎先生を記念して平成9年に創設されました。

第11回の受賞作品が下記の通り決定いたしましたのでご紹介します。



湖中 真哉 著

『牧畜二重経済の人類学―ケニア・サンブルの民族誌的研究』
（世界思想社）

これまでの受賞作品

第１回　廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会　1997年
　　原洋之介著『開発経済論』岩波書店　1996年
第２回　絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社　1997年
　　深川由起子著『韓国・先進国経済論―成熟過程のミクロ分析―』日本経済新聞社　1997年
第３回　中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣　1999年
　　辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合―構造調整政策下における役割と育成―』日本経済評論社　1999年
第４回　峯陽一著『現代アフリカと開発経済学　市場経済の荒波のなかで』日本評論社　1999年
第５回　黒崎卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店　2001年
　　西川潤著『人間のための経済学―開発と貧困を考える』岩波書店　2001年
第６回　石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店　2002年
　　脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治―開発の中の英領インド』名古屋大学出版会　2002年
第７回　平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社　2002年
第８回　石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社　2003年
　　安原毅著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論　2003年
第９回　藤田幸一著『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』
　　京都大学学術出版会　2005年
第10回　谷正和著『村の暮らしと砒素汚染－バングラデシュの農村から』九州大学出版会　2005年

湖中 真哉 著
『牧畜二重経済の人類学―ケニア・サンブルの民族誌的研究』
（世界思想社）

審査委員選評

本書は、ケニアのサンブルにおける生業経済と市場経済の並存の様相を民俗誌的なアプローチによって分析した試みである。サンブルの牧畜農村で従来の生業経済が市場化に如何に対応してきたか綿密な実態調査を通じて明らかにし、両者の併存的複層化を牧畜二重経済原理として一般化しようとしている試みは評価できる。特に、調査の枠組みと方法が明確であり、フィールド調査が有効に活用されており、家畜商の取引の記録からの分析は真に興味深い。

経済の実態を数字だけから把握するのではなく、彼らの日常生活の言動を通して経済行為の背景にある文化的要素もふくめて鋭く分析している点に、文化人類学者ならではの視点が生きている。市場経済に組み込まれるか、あるいは生業経済を守り続けるかという二者択一的な発想ではなく、若干無理はあるが、家畜を地域通貨として位置づけ、その市場機能を評価・分析して、アフリカでは、市場は機能しないという「伝統的な考え方」に終止符をうとうとした意図に拍手を送りたい。さらに、「牧畜二重経済が消滅するという予測を前提にすることで、結果的に彼らの内発的発展の萌芽を摘み取ってはならない」という文化人類学者的視点は、開発問題の経済学的分析から開発政策を論ずる経済学者にとって一つの警鐘だと思う。そして、開発政策が地域住民の経済福祉に資するものであるためには地域・住民の価値観や行動を的確に把握する必要があるという指摘は、従来からなされていたが、本書はケニア牧畜民について真にそのような成果をあげているといえるであろう。

大半の途上国政府は伝統的な生業経済に市場経済原理を導入し、経済の効率化を通じて貧困削減目標を達成しようとしているので、本書は、開発政策担当者やその協力者に対して示唆に富む。

しかし、本書では家計簿からの調査はサンプルが二つのみであり、つっこんだ分析になっているとはいいがたい。

また、科学的な数量分析ができていない点も気になる。さらに、先進市場経済でも、農家の自家消費は多いのが現実であり、これをもって二重経済の証左にはならないという指摘もある。この牧畜二重経済体制を「内発的発展」のモデルとしているが、政策担当者は、二重経済体制のメリットに対する関心と同時に、それを確立する際の条件整備（政策インセンティブを含めて）の難易度に関心がある。この点の分析の一般化が努力不足であったといわざるを得ない。

以上の論点からわかるように、審査委員の間でかなりの異論が最後まで飛び交ったが、若手の学者がユニークなデータを収集し、独自の分析の展開を通じて、開発議論への新しい挑戦を大切にするという「大来賞」の狙いから、本書の推薦を最終的に合意したということを付記したい。

（廣野　良吉　成蹊大学名誉教授）

第１１回応募作品の傾向と選考経緯

2006 年 4 月から 2007 年 3 月までに出版された開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとした日本人が執筆した日本語及び英語の研究図書を対象として公募したところ、35 件の応募があった。作品のテーマは、経済関連（企業・経営・金融・貿易等）のものが 12 件、社会・環境・人類学を中心とした作品が 7 件、国際協力、開発援助全般を扱ったものが 6 件、国際教育協力に関する作品が 3 件、開発経済の視点から開発援助を論じた作品が 2 件、国際関係・政治を中心に扱ったものが 2 件、その他が 3 件であった。

当財団内部で予備審査を行った結果、受賞作品に加え、下記 3 件が最終審査に残った。

末廣 昭著　『ファミリービジネス論』 名古屋大学出版会
須田 敏彦著　『インド農村金融論』 日本評論社
星野 進保・中西 洋著　『インドと中国の真実』 ミネルヴァ書房

最終審査で委員から出された意見はおおよそ以下のとおりである。末廣氏の作品は、大変な時間と労力を費やして収集したデータに基づいてタイのファミリービジネスを分析していることによる学術面における貢献が期待できる。

さらに、財閥企業の発展を捉えることによって、後発工業化プロセスを明らかにしている点が斬新であり、他国への適用可能性がある。須田氏の作品は、経済自由化政策の導入、特に金融改革の成功事例の特徴を実態調査を元にした分析は、インドの金融を題材としながらも途上国の農村金融一般についての示唆に富んだ内容であり、実務者にも有用なツールを提供している。星野氏・中西氏の作品は、インド及び中国の発展について、宗教・哲学の視点を取り入れて論じている点が興味深く、両国に関する知見を広げるうえで、参考になる。

今回の受賞作品、『牧畜二重経済の人類学－ケニア・サンブルの民族誌的研究』は、現地に密着した実態調査に基づいて、文化人類学的視点からケニア・サンブルの経済活動を家畜商取引の記録などの外部からは知り得ない実にユニークなデータを収集し、牧畜民の社会において市場が機能していることを明らかにしている。また、アフリカの牧畜社会の変容と現状を紹介している研究は日本では蓄積が少なく、この地域で調査を実施する実務者にとって、非常に参考になる文献である。また、生業経済への市場経済原理の導入が課題となっている政策担当者にとっても、将来の活用の余地が大きい研究である。

受賞者の言葉

日本初のグローバリストと称される大来佐武郎先生のお名前を冠した本賞を授かりましたことは、このうえない喜びでございます。審査いただきました先生方、および本賞の関係者の皆様方に、心より御礼申し上げます。

故伊谷純一郎先生によって創始された生態人類学のアフリカ研究は、徹底した現場主義によって人類とは何かを問い直して参りました。1970年代中盤には、佐藤俊先生と太田至先生の先導のもとに、東アフリカの牧畜民を対象とした調査研究が開始されました。1984年にこの地が大旱魃に襲われてからは、人類への問いは、国際開発研究への問いと呼応しながら深められて参りました。この度の受賞は、30年以上におよぶ先達の調査研究のよき伝統と蓄積が結実したものであると同時に、生態人類学が、国際開発研究に貢献し得ることを示したとすれば、望外の喜びです。

マサイの戦士に代表されるように、東アフリカの牧畜民は、しばしば、世界で最も頑固に文化を守ってきた人々と言われます。しかし、わたくしが調査を開始した1992年には、開設されたばかりの家畜定期市に人々は押し寄せて来ました。現地調査を深めるなかで、彼らは決して頑固に文化に固執しつづけているのでも、自己の文化を放棄したのでもなく、文化を維持しながらも、新しい状況を生き抜こうとしていることがわかり、二重経済の様相が明らかになって参りました。そして、地元住民が新しい状況にどのように工夫しながら対応してきたのかを学び取ることにより、それを手がかりとして、アフリカの開発の将来像を描き出していけるのではないかと考えるようになりました。今後は、本作で試みた方法論をさらに発展させながら、彼らの廃物資源利用に学ぶ貧困削減策の提案や、地元民の相互扶助に学ぶ難民支援体制の構築にも挑戦してゆきたいと考えております。受賞までにお世話になった多くの皆様方に、心より御礼申し上げます。

（湖中 真哉）

著者略歴

湖中真哉（こなかしんや）　1965年生まれ。1994年筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科にて論文審査により博士（地域研究）の学位取得。静岡県立大学国際関係学部助手を経て、現在静岡県立大学国際関係学部准教授、放送大学教養学部協力分担講師、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、国立民族学博物館共同研究員、日本ナイル・エチオピア学会評議員。

主要著書　「小生産物（商品）の微細なグローバリゼーション―ケニア中北部・サンブルの廃物資源利用」（小川了　編）『論文集　資源人類学　第4巻　躍動する小生産物』弘文堂、2007年11月刊行予定。

「民族誌の未来形へ向けての実験―オンライン民族誌の実践から」（飯田卓・原知章　編）『電子メディアを飼いならす―異文化を橋渡すフィールド研究の視座』せりか書房、pp.221-234、2005。

「地域通貨はなぜ使われないか―静岡県清水駅前銀座商店街の事例」『国際関係・比較文化研究』（3）2：pp.33－58、2005。

表彰式および記念講演会

表彰式および記念講演会
日　　時　2007年11月16日（金）午後3時から
場　　所　財団法人国際開発高等教育機構　研修室
参 加 費　無料
申し込み　お名前、ご所属先名、電話番号、E-mailを添えて下記お問合せ先までご連絡ください。

FASID

審査委員会

●審査委員長●

川上 隆朗　FASID理事長

●審査委員●

浅沼 信爾（一橋大学国際・公共政策大学院客員教授）、荒木 光弥（国際開発ジャーナル社代表取締役）、
大来 洋一（政策研究大学院大学教授）、河野 善彦（笹川平和財団顧問）、
廣野 良吉（成蹊大学名誉教授）、角﨑 利夫（FASID専務理事）、
大塚 啓二郎（FASID連携大学院プログラムディレクター）、
湊 直信（FASID国際開発研究センター所長代行）

●お問い合わせ先●

FASID
（財）国際開発高等教育機構　国際開発研究センター　中田
〒102-0074　東京都千代田区九段南1-6-17　千代田会館5階
TEL：03-5226-0306　FAX：03-5226-0023　URL http://www.fasid.or.jp　E-mail:okita2007@fasid.or.jp